

タスマニア先住民の動態的差別分析

張 能 美希子

1. はじめに
 - 1.1. タスマニア先住民の差別問題
 - 1.2. 動態的差別の定義
 - 1.3. “存在抹消”の動態的解明に向けて
2. タスマニア先住民
 - 2.1. タスマニア先住民の人類学的分析
 - 2.2. タスマニアのアボリジニ政策
 - 2.3. 最後のタスマニア先住民を巡る議論
3. タスマニア先住民と動態的差別要素
 - 3.1. 区別—タスマニア先住民という言葉の意味—
 - 3.2. 感情—白人アイデンティティ獲得のための葛藤—
 - 3.3. 行動—止まらない虐殺—
4. タスマニア先住民と差別要素のスパイラル
 - 4.1. 区別と感情のスパイラル—白人パラノイアのターゲット—
 - 4.2. 感情と行動のスパイラル—生活資源を巡る競合関係と虐殺—
 - 4.3. 行動と区別のスパイラル—競合関係の終結宣言と“存在抹消”の選択—
5. 結び

1. はじめに

1.1. タスマニア先住民の差別問題

「オーストラリアは人種差別の国である」⁽¹⁾。オーストラリアが白豪主義撤廃という大きな転機を迎えていた1972年に労働党政権移民大臣を務めたアル・グラスビーによって書かれた『寛容のレシピ』の第1章1行目はこの衝撃的な文章から始まる。著書の中でグラスビーは「オーストラリアで最も差別されているのは、アボリジニ⁽²⁾の人々である。アボリジニの人々が差別されている証拠は他の人々が差別されている証拠よりもいっぱい見つかる。生まれてから死ぬまで、人生のあらゆる局面で差別され続ける。」⁽³⁾とし、人種差別の国として悪評高いオーストラリアの中でも、さらに過酷な状況におかれているアボリ

(1) グラスビー (2002) p.15。

(2) アボリジニという言葉は辞書『大辞林 第三版』(p.68)で引くと「〔先住民の意。ヨーロッパ人による通称。アボリジンとも〕ヨーロッパ人の渡来前からオーストラリア大陸に居住していた民族の総称。」となっている。アボリジニという言葉に関しては、オーストラリア先住民として、普及している。しかし、タスマニアの先住民に関しては、タスマン人や、タスマニア・アボリジナルなど表現が分かれた。そこで本論ではタスマニアの先住民を「タスマニア先住民」と統一して扱うことにした。

(3) グラスビー (2002) p.69。

ジニの人々の立場を明確にしている。グラスビーの指摘どおり、統計はアボリジニの人々の生活がただ厳しいことだけを示す。その端的な例としては、アボリジニの人々の人口ピラミッドが、オーストラリアの国民平均のピラミッドとは全く異なる形態を示すことが挙げられる。オーストラリアの国民平均のピラミッドは先進国に特徴的なつぼ型を示す。一方のアボリジニの人口ピラミッドは、第三諸国に典型的な鋭く尖った三角を示している。これはアボリジニの人々の経済的・社会的地位が劣悪であることと関連している⁽⁴⁾。

しかし、統計から見える差別がアボリジニ差別の全てではない。アボリジニというものを定義するにあたり、肌の色、純血であるか否か、どのような文化的背景の下に生きてきたか、など様々な議論が錯乱し混乱した状態がある⁽⁵⁾。どのような定義が作り出されようとも、アボリジニの人々を上手く定義しきれないという問題は常に起こり続けるだろう。なぜならば、同化政策によって出自から切り離され、混血化が進んだアボリジニの人々が多数存在する社会の中で、誰を“アボリジニ”とするかは難しいからである⁽⁶⁾。さらにアボリジニという定義にはまって差別される人々がいるその一方で、アボリジニという定義から抜け落ちる混血の人々も迫害を受けてきた。混血のアボリジニの人々は、“アボリジニだ” “いや、アボリジニではない” という他人が彼らに対して発する二つのフレーズの狭間で翻弄され続けてきたといえる。「アボリジニである」という問題と「アボリジニではない」という問題が一番顕著に現れているのが、タスマニアのアボリジニ（以下タスマニア先住民）のケースであるといえる。タスマニア最後の純血のアボリジニはトルガニニ⁽⁷⁾という女性である。彼女が1876年5月8日に死んだということはよく知られた史実として本の中で頻繁に見かける。例えば、タスマニアと辞書で引いてみると、「オーストラリア大陸の南東方にある島。オーストラリアの一州。1642年オランダ人タスマンが発見。先住のタスマン人は1876年絶滅⁽⁸⁾。銅・亜鉛など地下資源に富む。州都ホバート。」⁽⁹⁾とされていた。

ところが実際政府が出す統計にはタスマニアに住むタスマニア先住民の子孫⁽¹⁰⁾の人々が数字として存在している。タスマニア州に住むアボリジニは2001年の時点で15,733人とされている。この数字はアボリジニ人口全体の3.8%であり、オーストラリア全体で見るとオーストラリア首都特別地域の0.9%について二番目に少ないが、決してゼロではない⁽¹¹⁾。Ryan (1996) も指摘したように、最後のタスマニア先住民の死亡という有名な史実の下で、現在も生き続けているタスマニア先住民がかき消されてしまう。アボリジニの人々が、

(4) 藤川 (2004) p.219。

(5) Garden (2000) は以下のインターネット上のものを参照した。 <http://www.aph.gov.au/LIBRARY/pubs/rn/2000-01/01RN18.htm>

(6) アボリジニのアイデンティティの複雑さを示す事例として、兄弟姉妹間でも、外見との一致や本人の意向によってアイデンティティの選択が異なるケースを挙げることが出来る。小山・窪田 (2002) p.99-p.100。

(7) 文献によって「トルガニニ (Truganini)」とする場合と「トルカニニ (Trukanini)」とする場合など、複数の呼称が見られるが、本論では「トルガニニ」で統一する。

(8) 文献によってはタスマニア先住民のことを「タスマン人」としている。

(9) 『大辞林 第三版』(項目「タスマニア」p.1546.)

(10) “However, they are unquestionably descendants of Tasmania Aborigines and they retain their identity as Aborigines.” と Ryan (1996) p.1. によって指摘されている。

(11) Australian Bureau of Statistics (2004) の Aboriginal and Torres Strait Islander population の表 S 5.1 INDIGENOUS CENSUS COUNTS (a) のうち、「PROPORTION OF TOTAL INDIGENOUS COUNT (%)」の部分参照。

白人の入植後極端に減少したことから、一時“死に行く種族”として考えられたことは、オーストラリア全体に共通する⁽¹²⁾。アボリジニ人口の内、混血のアボリジニが占める割合が増大している傾向はどの州でも共通している⁽¹³⁾。しかし、Ryan (1996) が指摘したように本土のアボリジニに関して“絶滅”という概念は共有されておらず、タスマニア先住民に対してのみ“絶滅”という概念が広く普及している⁽¹⁴⁾。

ナチス・ドイツは優生思想に合致しない人間を絶滅させることを目指して⁽¹⁵⁾ 残忍な手段を駆使したことで有名である。しかし、“最後のユダヤ人”や“最後のロマ”の氏名と死亡日が記録されていないという点でナチス・ドイツは彼らの目標であった「劣性な人間達の抹殺」に失敗したと言えるだろう。オーストラリアの白人たちは、土地を巡って争わなければならない厄介な相手として、アボリジニの人々を認識してきた。白人たちはアボリジニの人々を、自分の都合に合わせて様々な形で窮地に追いやり、差別してきた。結果、オーストラリアの白人たちは、ナチス・ドイツさえも達成し得なかった被差別集団の存在の抹殺に成功した。これは差別の暴走が、差別を最終的なレベルまで到達させた状態と言い換えることができるだろう。

1.2. 動態的差別の定義

張能 (2007) において、張能は新たな差別定義を提案した⁽¹⁶⁾。張能 (2007) は、動態的差別の定義を組み立てるに当たって、差別には注目すべき特徴が二つあるとしている。一つ目の特徴は、差別の動態的な性質である。過去の差別研究において、差別を静止画的に捉えることが一般的であった。だが差別という社会現象は、動態的に時間と共に変化していく。そのため、差別を静止画的に捉えるには限界があるといえる。例えば、過去において女性の参政権が認められていないことは、“普通”のこととされていた。現在ではこのような“差別的”とされる政治制度は維持されていない⁽¹⁷⁾。しかし、いくつかの女性学の研究が示すように、女性に対する差別はより複雑かつ狡猾になり、未だに女性の地位を難しくしている⁽¹⁸⁾。つまり女性差別⁽¹⁹⁾はなくなったわけではなく、形を変えてより複雑にな

(12) Ryan (1996) p.1。

(13) Ryan (1996) p.1. で “They may not be “full blooded”, but then neither are most mainland Aborigines.” とされている。また『もっと知りたいアボリジニ』青山 (2001) p.144にも記述がある。

(14) Ryan (1996) p.1。

(15) ヒル (1993) p.9-p.10。

(16) 第一節第二項の「動態的差別の定義」は、張能 (2007) の要約である。よって、詳しい説明は参考文献に挙げられた論文に譲ることとする。

(17) 日本で25歳以上の男性全てに選挙権が認め始められたのが1925年であった。1946年4月10日の衆院選挙が女性も参加することが出来た選挙第一回目である。他にも女性に認められていなかったものとして、財産管理権・離婚の権利等の不平等などがあった。伊藤 (1974) p.52。

(18) 江原は近代の同権化された社会の中の女性差別の難しさを「女性は男と同じであるか、男とちがうか」という問いに集約している。この問いの難しさは、女性は男性とは異なる、しかし男性と異なることを認めると男性ではないことで差別される。男性とは違わないという結論で話を進めると、男性とは異なるという「女性」という性そのものが無視されるという差別が起こる。つまり、どちらを選択しようとも、質問の答えは常に女性差別に結びつく。元来の明文規定の中でどのように女性と男性が異なる扱いを受けているか、というような明確に目に見える違いは是正されつつある。近年では、江原の問いのように女性というアイデンティティの難しさを含めてより抽象的な議論が女性学の中で為されている。江原 (1985) p.85。

(19) 差別を基本的に、「排除、対象の周辺化」とする江原 (1985)、坂本 (2005)、佐藤 (2005) の議論を引き継ぐ。

る様相を呈しているのである。もう一つ注目すべき差別の特徴は、その多面的な社会的機能である。差別は一面的にネガティブな破壊行為と考えられている傾向がある。先行研究においても、差別の多面的な社会的機能を捉えずに、差別の撤廃を目指す議論が多い。だが実際には差別の社会的機能は複雑で、一概に全てがネガティブに作用するとは言いがたい。例えば、会社が従業員を選ぶのに学歴を使用することは選考費用を削減⁽²⁰⁾するためによく見られる行動である。しかし、これも行き過ぎれば学歴差別と言われる。

要するに、差別にはネガティブな作用を発揮する場合（例：学歴が学歴差別の根拠として機能した場合）と、そうでない場合（例：学歴が一定の選考基準として機能した場合）があり、それは個人の価値観によって判断が異なる。各個多様な価値観を論じることは不可能なので、議論から除く必要がある。しかし、それでも差別が動態的な性質ゆえに暴走し、ネガティブな作用へと変化していくメカニズムを包括している点は問題として残る。そこで張能（2007）では、差別行動 = f （区別，感情，行動）と定義した。この公式の特徴は、変数の力学的な関係や相互作用を議論に含めることが可能なことである。差別の暴走は、区別，感情，行動という差別の各要素が生み出すスパイラルによって行われると説明された。

1.3. “存在抹消”の動態的解明に向けて

タスマニア先住民に対する差別が高次のレベル，“存在抹消”まで到達したことはすでに述べた。そこで、本稿の論旨は、タスマニア先住民が存在を抹消されるに至った経緯を、第1節2項で説明した動態的差別の定義を用いて分析することとする。タスマニア先住民の存在抹消の矛盾という問題に取り組んだ先行研究として Lyndall Ryan が挙げられる。歴史的な出来事を仔細に見ていくことで、タスマニア先住民の人々の生活が途切れることなく現在に続いたことを Ryan の先行研究は解き明かしている。しかし、Ryan の研究の視点は、主にタスマニアとタスマニア先住民の歴史に集中しており、存在抹消に至る構造やメカニズムというものについてはほとんど言及しないままで終わっている。

そこで、本論では歴史的な分析に加えて、白人入植者のアボリジニに対する区別，感情，行動が“存在抹消”という現象にどのように影響したかを論じたい。まず第2節でタスマニア先住民と白人入植後のタスマニアの歴史について振り返る。第3節では動態的差別の要素を、第2節で論じた歴史と重ね合わせながら検証する。第4節ではタスマニア先住民のケースにおける差別のスパイラルを明らかにしつつ，“存在抹消”の解明に向けて議論を進めて行く。そして第5節で結びへと統括する予定である。

2. タスマニア先住民

2.1. タスマニア先住民の人類学的分析⁽²¹⁾

高山・石川・高橋（1992）によれば、オーストラリアのアボリジニは、オーストラロイドと分類されることもあったが⁽²²⁾、藤川（2004）はモンゴロイドに分類されるようになった

(20) Akerlof (1976)

(21) 本節を“人類学的”と銘打ったのは、本節で引用した知識に対して、参考文献が“anthropological”という形容を行っていたためである。Ryan (1996) p.10。

(22) 高山・石川・高橋（1992）p.10。

たとしている⁽²³⁾。とはいえ、通常モンゴロイドと聞いて人々が想定する黄色人種とアボリジニの人々の外見はかなり異なる。藤川（2004）によればアボリジニの人々は、一般的に暗褐色の皮膚と波状ないし縮れた黒い頭髪をもち、額はやや狭く眉が突き出し、長い手足を持っている⁽²⁴⁾。幼少期に金髪の頭髪のものが見られることが特徴的である⁽²⁵⁾。藤川（2004）では、彼らの祖先は約5万年前にはすでに近隣の大陸からオーストラリアに移住していたとされる⁽²⁶⁾。なお、彼らの文化について藤川（2004）は3万年前の死者には顔料によるコーティングが見られ、2万6000年前のものとされる人骨は火葬にふされているとしている。このことから、彼らがすでに独特の宗教観や、文化を展開していたことが窺い知れる⁽²⁷⁾。

高山・石川・高橋（1992）が指摘するように彼らの文化が文字を持たないため、アボリジニの人々によって作られた史料は非常に少ない。そのため彼らの文化を知ろうとするとヨーロッパ人を始めとする外来者によって作られた史料を多く利用せざるを得ない。当然これらの外来者による史料は固有の視点を持つため、アボリジニの人々の研究はこの点において問題を抱えているといえることが高山・石川・高橋（1992）によって指摘されている⁽²⁸⁾。アボリジニの人々については、未だに解明されていない部分が多い。例えば、藤川（2004）が指摘するように、白人入植以前のアボリジニ人口の推定なども、未だ定説が設けられていない。藤川（2004）によれば推定が行われた初期には25万から30万とされた全土のアボリジニ人口も、現在では75万や100万とも言われ定かではない⁽²⁹⁾。だが、唯一明らかなことは、白人の入植と同時にアボリジニの死亡者が激増し、人口が減少したということである⁽³⁰⁾。藤川（2004）は死亡の原因として、白人が持ち込んだ梅毒、インフルエンザ、麻疹などの伝染病、そして何よりも白人が大量にアボリジニの人々を殺戮したことを挙げている⁽³¹⁾。

タスマニアはオーストラリアの大陸の南にある島で、本島の面積は約64,400 k m²ほどである⁽³²⁾。タスマニアの総人口は2005年の時点で485,300人⁽³³⁾である。本島以外にキング島、フリンダーズ島などを含めてタスマニア州となっている⁽³⁴⁾。ブレイニー（2000）によれば、タスマニアのアボリジニと本土のアボリジニは、約1万年程前から分かれて生活していたとされる⁽³⁵⁾。そのため、肉体的にも文化的にも多少の違いが両者の間には存在したようだ。Ryan（1996）によると、タスマニア先住民はタスマニア先住民独特の言語を使用してい

(23) 藤川（2004）p.3。

(24) 藤川（2004）p.3。

(25) 高山・石川・高橋（1992）p.10。

(26) 藤川（2004）p.3。

(27) 藤川（2004）p.5。

(28) 高山・石川・高橋（1992）p.10。

(29) 藤川（2004）p.13-14。

(30) アボリジニ社会が疫病などで弱体化した後、白人入植者の攻撃で壊滅的な打撃を受けたと多くの先行研究が指摘している。

(31) 藤川（2004）p.13-14。

(32) 世界大百科事典（1988）（項目「タスマニア」）p.277。

(33) Australian Bureau of Statistics（2005）

(34) 世界大百科事典（1988）（項目「タスマニア」）p.277。

(35) ブレイニー（2000）p.32。

たと指摘されている⁽³⁶⁾。しかし、タスマニア先住民が文字を持っていない点については、本土のアボリジニと同様であるとされる⁽³⁷⁾。Ryan (1996) はタスマニア先住民の肉体的な特徴として、羊毛のような髪と赤茶色い肌を挙げている⁽³⁸⁾。しかし身長などについては、それぞれ個人差があり明確に本土のアボリジニと異なる点は見当たらないとされている。ブレイニー (2000) に、約3000年前に何らかのタブーのせいで、ひれのある魚・骨のある魚をタスマニア先住民が食べなかったとの指摘がある⁽³⁹⁾。Ryan (1996) は骨から道具を作ることもしなかったとしている⁽⁴⁰⁾。その代わりカンガルーやワラビーなどを多く食物として捕獲していたため、タスマニア先住民は比較的発達した石器を使用していたとしている。タスマニアの西側では、エビやカニなどの食料が一年を通じて潤沢で、他にもオットセイやゾウアザラシ、マトンバードなどが一年の内特定の時期に豊富だったとされている。Ryan (1996) によれば、食物を探して歩く必要が少なく、タスマニア先住民は比較的固定化された住居に住んでいたとされている⁽⁴¹⁾。移動する場合も季節に合わせて毎年同じ場所を訪れていたようだ。本土のアボリジニと同様に、タスマニア先住民という呼称は、非常に大まかな分類でしかない。厳密に言えば、本土のアボリジニにも、タスマニア先住民にも、内部に複数の言語やバンドと呼ばれる集団が存在し、それぞれに少しずつ異なる文化を保有していたとされる⁽⁴²⁾。しかし、タスマニア先住民が本土のアボリジニと分離した後の社会生活については、ほとんど研究がなされておらず不明な点が多いとされている⁽⁴³⁾。

タスマニア先住民が住んでいた自然環境は、本土と長期間隔絶されていた結果、非常に独特である。本土からの隔離が独自の進化をもたらしたと同時に、捕食獣である狐がタスマニア島には生息していない。本土では狐によって絶滅してしまったとされる無数の小型有袋類がタスマニアには現在も生息しており、貴重な研究対象として保護されている⁽⁴⁴⁾。タスマニアは、1803年にイギリスの流刑地として入植が開始され、1853年にその役割を終えている。オーストラリア国内最大級の刑務所、ポート・アーサーはタスマニアにある。ポート・アーサーは現在歴史的観光地として一般に公開されており、実際にその史跡を見ることが出来る。タスマニアは流刑地として早くから使用されたため、タスマニアの州都ホバートはシドニーについて二番目に建設された古い都市である。1856年から責任内閣制を伴う自治植民地となり、名称もすでに1820年代から通用していた発見者のタスマンから取られたタスマニアに正式に改称している⁽⁴⁵⁾。

(36) Ryan (1996) p.11。

(37) 松島 (2000) p.29。

(38) Ryan (1996) p.10。

(39) ブレイニー (2000) p.22-p.23。

(40) Ryan (1996) p.10。

(41) Ryan (1996) p.10。

(42) Ryan (1996) p.14。

(43) Ryan (1996) p.10。

(44) 現在もタスマニアの貴重な生態系を守るために政府は狐をタスマニアに入れないための運動に力を入れている。<http://www.parks.tas.gov.au/factsheets/threats/FoxPresence.pdf>

(45) 世界大百科事典 (1988) (項目「タスマニア」) p.277。

2.2. タスマニアのアボリジニ政策

小山・窪田（2002）によれば、1967年の国民投票で憲法が改正されるまで、連邦議会は先住民政策に関する立法権を握ることができなかったとされている⁽⁴⁶⁾。つまり連邦結成以前の植民地政府から継承されたそれぞれの州政府の法律・行政によって、先住民に関する事柄は取り決められてきたようだ⁽⁴⁷⁾。そのためアボリジニに対する政策は、多少地域によって差がある。流刑地であるタスマニアへやってくる入植者は自由移民ではなく囚人が主である。つまりタスマニアの入植者はイギリス社会の最下層に当たる、質の悪い二級市民たちに偏る傾向があった。小山・窪田（2002）では、脱獄囚がタスマニアの山野を跳梁するなど、タスマニア先住民たちに危害を加えられる機会が多かったとされている⁽⁴⁸⁾。そのため、追い詰められたタスマニア先住民たちは、入植者の婦女子を襲う、小屋に火を放つなどの抵抗に出たとしている⁽⁴⁹⁾。小山・窪田（2002）は、白人入植者とタスマニア先住民たちの関係が悪化し、白人入植者は報復のためにアーサー準総督に強硬な手段を取るよう要求し「あらゆる適切な手段」を用いる許可を取得したとしている⁽⁵⁰⁾。その後タスマニア先住民に対する虐殺が続いたため、植民地政府は1828年末にタスマニア先住民を隔離することにした。しかし、あまり隔離の効果が上がらないため、タスマニア先住民に対する戒厳令が発せられた。内容は、タスマニア先住民を生け捕りにし、州政府に引き渡せば大人一人に5ポンド、子供一人に2ポンドの報奨金を支払うというものだった⁽⁵¹⁾。しかし、これすらも歯止めにならず、白人入植者はタスマニア先住民の殺戮をやめなかった。そのため1828年末から翌年にかけての1年程の間に全島の約三分の二の人口が抹殺されたとLaidlaw（1981）は推定している⁽⁵²⁾。1830年、再びタスマニア先住民の捕獲計画としてブラック・ラインという計画が実行に移された。計画では先住民をタスマニア島東南のタスマン半島に追い込み、捕縛する予定であった⁽⁵³⁾。しかし、計画は失敗し、ただ単にタスマニア先住民を殺害する結果となった。ブラック・ラインの失敗後、残ったタスマニア先住民の人々は1831年から翌年にかけてガン・キャリッジ島へ、そしてその後より大きなフリンダーズ島へと隔離されている。小山・窪田（2002）は、タスマニア先住民はこの島でヨーロッパ式の衣服や小屋を与えられ、同化のための教育を受けたが慣れない悪環境の中で死亡が相次いだとしている⁽⁵⁴⁾。このようにタスマニア先住民の人口は短期間のうちに激減してしまった。オーストラリア本土の盗まれた世代（Stolen Generation）のような本格的同化政策を発動する間もなく、1847年には47人にまで減少しほぼ壊滅状態に陥った⁽⁵⁵⁾。そして、タスマニア先住民の減少はそのまま止まらず、最後の純血タスマニア先住民のトルガニニの死亡1876年まで続いた⁽⁵⁶⁾。

(46) 小山・窪田編（2002）p.132。

(47) 小山・窪田編（2002）p.132

(48) 小山・窪田編（2002）p.107。

(49) 小山・窪田編（2002）p.107。

(50) 小山・窪田編（2002）p.107。

(51) 小山・窪田編（2002）p.108。

(52) Laidlaw（1981）p.44-p.72。

(53) クラーク（1978）邦訳 p.108。

(54) 小山・窪田編（2002）p.108。

(55) 世界大百科事典（1988）（項目「タスマニア人」）p.277。

(56) 小山・窪田編（2002）p.114。

2.3. 最後のタスマニア先住民を巡る議論

純血のタスマニア先住民に注目が限定されているのは、純血のタスマニア先住民が人類学的に標本としての希少価値があると考えられていたからである。例えば、タスマニア先住民について「一体としてまとまった人骨は5体しか残されておらず信頼しうる記録はないに等しいとされる。」と評する書物もある⁽⁵⁷⁾。人間の階層の中でも最も最下位に位置づけられたタスマニア先住民たちは、類人猿と人の失われたつながりを解明する鍵として、重要と考えられていた⁽⁵⁸⁾。ダーウィンの進化論にならって、劣等な種としてのタスマニア先住民が優等な白人種との競合の果てに絶滅していくのを当然のことと白人たちは考えていた⁽⁵⁹⁾。タスマニア先住民の絶滅に際して、記録を残そうとした学者たちは争った。最後の純血のタスマニア先住民の男性とされていたウィリアム・ランネという男性が1869年に死亡した際、学術的に価値があるとされる彼の遺体を巡る争いは凄惨であった。ランネの遺体をタスマニア王立協会の博物館の収蔵物に加えようとする地元の人々と、個人的にロンドンの王立外科学会の外科医に送ろうとする人間とで遺体の奪い合いが勃発した⁽⁶⁰⁾。遺体は切り刻まれバラバラにされ、各部位を双方によって別々に持ち去られることはもちろん、墓を暴くことも行われた。しかし「最後の純血タスマニア先住民がトルガニニである」や「最後の純血のタスマニア先住民の男性はウィリアム・ランネである」という通説については、それが事実であったか判定の難しい状況がある⁽⁶¹⁾。例えばトルガニニに限定して見ても、幾つかの研究では1888年にカンガルー島で死亡したスーク (Suke) という女性が最後である、とされている⁽⁶²⁾。Rebe Taylor が取り上げたように、最後のタスマニア先住民の死亡が12年後であることや、トルガニニではなくスークであることがどれだけの意味があるのか、という感情が人々の間に存在しており、事の所在はあまり深く追求されていない⁽⁶³⁾。また、“最後”という言葉が、トルガニニの死亡によって象徴的にタスマニア先住民の種族としての終了と結び付けられて白人たちに認識されたために、やはりトルガニニが最後なのである、という見解など様々である⁽⁶⁴⁾。そのような混乱を伴いつつ、最後のアボリジニを巡る議論は多い。H. Ling Roth が1898年に掲載した “Is Mrs. F. C. Smith a “Last Living Aboriginal of Tasmania”?” という論文のタイトルが示すように、トルガニニでもスークでもなくスミス夫人 (Mrs. Fanny Cochrane Smith) が最後のアボリジニなのではないか、というような議論もなされており、状況が混迷している。議論の上で、どう取り扱われているのか、ということを決しても誰が純血のタスマニア先

(57) 世界大百科事典 (1988) (項目「タスマニア人」) p.277

(58) Ryan (1996) p. 2。

(59) Ryan (1996) p. 2。

(60) Ryan (1996) p.214-p.217。

(61) 本論ではトルガニニに論点を絞ったが、ランネが最後の純血タスマニア先住民の男性だったという説に異を唱える先行研究も存在する。例えば、松嶋 (2000) は p.186. で、ランネには本土のアボリジニの血が混じっていたため、ランネの遺体を争う争い自体が茶番だったと批判している。

(62) クラーク (1978) 邦訳 p.108-p.109. , Ryan (1996) p.220。

(63) Taylor (2004) p.139-p.144. Taylor は著書の中で、ほとんどのオーストラリア人が、誰が最後のタスマニア先住民なのか、について複数の説が存在していることを「知ってさえいない」と記している。

(64) Ryan (1996) p.220. にトルガニニが最後の純血タスマニア先住民ではなかったが、彼女の死によって、ヨーロッパ人たちがタスマニアのアボリジニ問題が終結したという風に考えた、という点が指摘されている。そのため、彼女は純血か否かに、関わらず、やはり彼女が“最後”であるという見解が示されている。

住民であるか、そして誰が本当に最後の純血のタスマニア先住民であったかを突き止めることは非常に難しいと思われる。なぜならば、前述したようにタスマニア先住民についての記録は彼らが文字文化を持たないことと、白人入植者の破壊によってほとんど残っていないからだ。そのため、記録に残っていない範囲で何らかの交流が外部と為されていたとしてもそれが把握できない。さらにタスマニア先住民が隔離されたとする1万年もの長い時間に完全にタスマニア先住民と本土のアボリジニの間に交流が皆無であったか、ということについて事実を知ることは非常に難しい。

3. タスマニア先住民と動態的差別要素

3.1. タスマニア先住民という言葉の意味と区別

差別の第一のプロセスとして、タスマニア先住民たちがどのように白人入植者たちに区別されていたか、という点は非常に重要である。青山(2001)は、ただの“野蛮人”としてのアボリジニと、“高貴な野蛮人”の概念の間で揺れ動く入植初期の白人たちについて研究の中で触れている⁽⁶⁵⁾。白人たちは先住民を無為自然な民、“高貴な野蛮人”としてロマンティックな幻想を抱き賛美した側面もあり、一概にアボリジニ（アボリジニ全体に対して）を野蛮と捉えていた訳ではなかったことが青山(2001)の議論からわかる。しかし、文明化されていく生活を賞賛していたこの時代において、啓蒙思想家たちは自然の生活に対してむしろ批判的であった。また前述のように人間の最下層として、類人猿と人の失われた繋がりを解く鍵としてタスマニア先住民たちは人類学的な研究対象にされている。タスマニア先住民たちを自分たちより下等な存在である、と白人たちが認識していたことが研究対象としてのタスマニア先住民の扱いによって示されている。

今一つ興味深い区別として、なぜタスマニア先住民はタスマニア先住民として区別されていたのか、という点である。本土のアボリジニと同様に、タスマニア先住民という呼称は、非常に大まかな分類でしかない。タスマニア先住民という呼称の中には、複数のバンドと呼ばれる40人から50人の集団が存在し、それぞれのバンドが上位の政治的単位である部族(tribe)に少しずつ異なる文化を保有していたとされる。厳密に言えば、本土のアボリジニにも、タスマニア先住民にも内部に複数の言語や文化的傾向の違い、などの特徴が部族によって存在していた訳である。例えば、タスマニア先住民には、9つの部族があったとされ、それらが平均で5つか6つのバンドを含有していたとされている⁽⁶⁶⁾。

確かに1万年の間本土から隔離されてきたという生活環境は、タスマニア先住民全体に共通する。そのような見地に立てば、どの部族に所属したか、ということは比較的小さな違いしか生み出さない些細な問題であったため、タスマニア先住民であるということが一番大きな人類学的違いを判断する分類として重要だったことも考え得られる。しかし、科学や文明を持たないことでアボリジニを蔑視してきた白人が、これらの文化的な違いを無視して、タスマニア先住民として彼らを一括りにした意義は何だったのであろうか、という疑問がまだ残る。このタスマニア先住民という括りについて考察を深めて言えることは、タスマニアの限られた空間の中で、白人に対する集団としてのアボリジニ全体、という意味しか持たないということである。つまり、“タスマニア先住民”はタスマニアという空

(65) 青山(2001) p.29。

(66) Ryan(1996) p.14。

間の中で、白人に対してアボリジニという下等な白人以外の集団を判別して用いられた言葉、として解釈できる。

また混血のタスマニア先住民に対しての区別であるが、彼らはアボリジニよりも高等であり、白人よりも下等な存在として判断されていた⁽⁶⁷⁾。混血のアボリジニは“混血”という言葉が示すように、白人でもアボリジニでもない中間の存在とされ、それに相応しい中間の社会的立場を得ていたのである。しかし、混血アボリジニの社会的立場は「区別は、二項対立でしかない⁽⁶⁸⁾。」という議論に抵触しない。なぜならば、混血アボリジニはやはり白人の部類に属することが出来ない被差別階級だからである。幾度となく白人との混血化が進んで、彼らが白人に類似した見かけになることは可能である。それでもなお、彼らの中にアボリジニの先祖が一人でも居て、それを周囲の人が知ることになれば、彼らは周囲の対応によって白人として生活することを許されなくなる。全ての先祖が白人であるということが明確な集団の中で、外見的に白人化した人間がアボリジニの祖先を持つということで切り離され、差別を受けることは常に起こりえる⁽⁶⁹⁾。

3.2. 白人アイデンティティ獲得のための葛藤と感情

タスマニア先住民に対する白人たちの感情は、動物に対するそれと変わりなかったと言える⁽⁷⁰⁾。このような見解は、当時の白人たちに共通している。タスマニア先住民たちの意向を無視し、絶滅動物のように標本扱いすることに対して白人たちは抵抗を示していない。そればかりか、人間の中で最も最下層の猿により近い存在として、タスマニア先住民を類人猿と人間の違いを解く鍵として、憚らずに研究対象としていた。これらは広く白人たちに普及していた考えで、特別な状況を除いて⁽⁷¹⁾タスマニア先住民に対して強い感情ではなかったといえる。

タスマニアの白人たちの、特有の感情として想定できることは、コロニアルな白人パラノイアの傾向が強いことである。コロニアルな白人パラノイアは、オーストラリア全体に存在しており、オーストラリアという国の形成に関わる推進力の一つである、とハージ(2003)は論じている⁽⁷²⁾。オーストラリアのような植民地に移住したヨーロッパの白人たちは、本国からはじき出された最下層の人間であった確率が高かった。当時のイギリスが、本国での“ゴミ(最下層の人間)”を、植民地に移住させることで有効な労働力として転換しようとしたことは、先行研究ですでに指摘されるところである⁽⁷³⁾。元々自分が属する

(67) 鈴木(1995) p.30-p.33 鈴木は、結婚や就職などの様々な社会生活の上でアボリジニに近い外見の混血アボリジニよりも、白人に近い外見の混血アボリジニの方が有利であったことを指摘している。

(68) 張能(2007) p.6。

(69) 金髪で白人のように白い肌を持つアボリジニの男性が、小学校時代にアボリジニの特長を強く持つ両親の存在を知られるまで同級生に対するパッシング(なりすまし)が有効だった経験を語っている。彼はアボリジニとして差別されるのみならず、アボリジニに見えないということでも差別されている経験も語っている。鈴木(1995) p.110。

(70) 青山(2001) p.62-p.64。

(71) “絶滅しゆく種族”として末期に特別な注目を浴び、取り分け研究対象としての興味を煽ってしまった時を除いて、同じような認識はアボリジニ全体に対して共通したものであったといえる。

(72) ハージ(2003) 邦訳 p.8.-p.18。

(73) 「人間のゴミ捨て場」として始まったという国家の起源は歴史家たちの論争の的になってきた。幾分ナショナリスティックな歴史家たちは、国の始まりにもう少し全うな理由を見出そうとした。藤川(2004) p.41。

社会の一員として地位を確立できるヨーロッパの上流階級に比べ、“ゴミ（最下層の人間）”のアイデンティティは複雑である。最下層の人間たちは社会の一員としての地位獲得のために、自分たちの白人性を誇示する必要があった⁽⁷⁴⁾。白人パラノイアとは、自分たちのアイデンティティを維持するために、白人性の誇示が偏執的なまでの強さになっている状態をいう。上述したように、タスマニアは流刑地だったためタスマニアの入植者たちのほとんどが囚人だった。彼らは貧しさゆえに盗みや犯罪に走るまさに最下層の人間であり、その点から言えばタスマニアの白人パラノイアは他の地域に比べ比較的強かったことも想像に難くない。タスマニアの白人入植者のタスマニア先住民に対する感情は、彼らの本国から持ち込まれた複雑なアイデンティティに対する葛藤から、常に暴発する可能性を秘めていたと言える。

3.3. 止まらない虐殺と行動

実話を元に作られた映画“*Rabbit Proof Fence*”⁽⁷⁵⁾から、子供たちを親元から引き離し白人化するという政策が推進される様子を知ることが出来る。白人化政策の中心的人物である A.O. ネビルが寄付金を集めるために、説明会を開いている一場面がある。ネビルは三世代に渡るアボリジニの混血と白人の交配によって白人化していく様子をスライドで訴え、最後に「アボリジニの中に流れる白人の血を無駄にしてはいけない」と付け加え強調している。当時、内面のみに限らず、外見的にも白人化させるために、アボリジニと白人の混血化を進めていたのは、「アボリジニを向上させる」⁽⁷⁶⁾という目的のためであった。ここにアボリジニに対して、圧倒的に自分たちを上位として認識している白人の高慢な態度が見える。しかし、このような同化政策は西オーストラリアなどでは盛んだったが、タスマニアではあまり行われなかった。

タスマニアの特徴として、タスマニア先住民たちが急速な勢いで白人入植者たちによって駆逐されている点に注目したい。前述したように、追い詰められたタスマニア先住民たちの初期の抵抗は、白人入植者の熾烈な報復を生んだ。小山・窪田（2002）が指摘したように、アーサー準総督によって「あらゆる適切な手段」を手にすることがタスマニア内で許可されていた。この制度は白人各個人がタスマニア先住民に対する強硬な手段を取ることを可能にさせ、虐殺は激しいものとなった。白人入植者による虐殺の中、植民地政府は1828年末にタスマニア先住民を隔離することを決定している。隔離の効果が上がらないため、タスマニア先住民に対する戒厳令が発せられ、ブラック・ライン、島への隔離、など様々な方策が取られたがアボリジニに対する虐殺は止まることがなかった。政府は減り続けるタスマニア先住民を自らの監督下に置く作業に追われていた。急激に落ち込む人口を前に、植民地政府は西オーストラリアで行われたような同化政策など実施する時間が無いほどであった。タスマニアが島であるため、タスマニア先住民たちが白人の手を逃れようとしても限度があった、ということが本土に比較して激しい人口の減少の一因であった

(74) 白人性の誇示、再確認の必要性もハージ（2003）p.11-p.13. に論じられている。

(75) “*Rabbit-Proof Fence*” は Doris Pilkington が自らの実母と叔母の体験を小説化したもの。後に映画化された。邦題は『裸足の1500マイル』で2003年に公開された。

(76) 同時にこの目的は、アボリジニの人々を性的に搾取した白人たちの行動を正当化する役割を同時に果たしているといえる。

といえよう。

4. タスマニア先住民と差別要素のスパイラル

4.1. 白人パラノイアのターゲット—区別と感情のスパイラル—

区別と感情のスパイラルの一環として、タスマニア先住民については、アボリジニ全体に対して、白人たちは「動物と同等」という見下した位置づけを行っている。それは、白人たちのアボリジニに対する“切り離し”であったといえる。被差別者を下等と位置づけることで「差別者と同じような心理的感覚が被差別者には無い」という説明をすることは差別一般における常套手段である。例えば、医薬品や化学実験などで多くの動物たちが実験動物として使用される。しかし、科学者たちが動物の感情を認めないことをマッソンとマッカーシーは指摘している⁽⁷⁷⁾。なぜならば日々実験動物として使用される動物たちに、人間と同じような感情があると想定してしまうと、途端に科学者たちの行為は動物たちの痛みを無視した残虐行為になってしまう。人間に対しても同じプロセスが必要であり、このような切り離しのプロセスは大虐殺を生んだ過去の差別等に顕著に見られる。タスマニア先住民のケースに留まらず「下等な存在（区別）＝下等なのだから、自分たちと同じように痛みを感じることは無い。攻撃しても気にすることは無い（感情）」というような行動の残酷さを自ら隠蔽するような心理的プロセス（切り離し）が介在し、それはタスマニア先住民のケースにも見られる。

「タスマニア先住民」という呼称は、タスマニアという空間の中で白人に対してアボリジニという白人以外の下等な集団を判別して用いられた言葉として解釈される、と3節1項で論じた。これは“切り離し”と白人パラノイアが相まって、白人入植者の攻撃ターゲットが誰なのかを明らかにした結果といえる。白人パラノイアの攻撃は、彼らを白人パラノイアに陥らせた上流白人社会に向かわず、常に非白人に向かう必要がある⁽⁷⁸⁾。なぜならば上流白人社会に攻撃を向けた場合、白人パラノイアに陥っている人間に下される評価は「社会的逸脱者」である。自らの社会の構成員としての資格を得るという彼の最終目的の達成は不可能になってしまう⁽⁷⁹⁾。よって、白人パラノイアとは無関係な非白人集団に攻撃が向けられる⁽⁸⁰⁾。非白人集団に攻撃を向け勝利した際、彼らは白人パラノイアからの解放を実現する。つまり、上流白人社会に対して自らの「白人性の主張」という目的を成立させたことになる。タスマニア先住民に対する区別は、感情とのスパイラルの中で、白人入植者たちに自らの白人性の主張のために攻撃ターゲット（非白人）を選択をさせている。漠然としたアボリジニではなく、「タスマニア先住民」という言葉はタスマニアのアボリ

(77) Masson, McCarthy (1996) p.54-p.68。

(78) ハージ (2003) p.119-p.121. ハージはレバノン系キリスト教徒の女性が、レバノン系イスラム教徒の女性のスカーフを剥ぎ取った例について触れている。レバノン系キリスト教徒の女性は、自らが差別される理由を社会に求めず、レバノン系イスラム教徒に求めている。このケースも、自らが社会のメンバーとしての地位を獲得使用とした場合、社会で周辺化された人間に対して攻撃を向けている。

(79) さらにオーストラリア社会の場合、彼らを白人パラノイアに陥らせたイギリス本国の上級社会に攻撃を向けようとしたとしても、両者の間の物理的距離の長さから考えて、困難だったことも補足として挙げておく。

(80) 仮に非白人集団との戦いに勝利したとしても、常に彼らが白人性の主張を認められるか否かについては疑問がある。それは白人性の認証が、白人パラノイアを保持する本人ではなく、本人の周辺によって為される必要があり、他人が本人と同様の判断をするかどうかは、常に確かではない。しかし、白人パラノイアはこれによって“パラノイア（妄想）”としての性質を拡大していくことは、ハージの理論でも論じられている。

ジニと限定している。そのため、白人入植者たちにとって、攻撃ターゲットをより明確にさせる機能を果たしていたといえよう。

4.2. 生活資源を巡る競合関係と虐殺—感情と行動のスパイラル—

白人入植者たちが、攻撃のターゲットとしてタスマニア先住民たちを認識し始めたプロセスについては、区別と感情のスパイラルの項で論じた。注目すべきは、彼らが非白人集団を攻撃のターゲットとして認識した結果、虐殺という行動に至ったことである。すでに上述したように、1828年末から翌年にかけての1年程の間に全島の約3分の2の人口が抹殺されたとの推定が存在するほど、タスマニアはオーストラリア国内で最も急速な人口減少を経験した地域である。タスマニア先住民を自らの白人性の主張のための攻撃対象としているならば、方策は幾つか考えられる。例えば、白人性の象徴の一つである白人文化をタスマニア先住民に普及させ、彼らを社会の最下層に組み込み、長期的な形で搾取する方法を取ることも可能であったはずである。

白人たちの行動が虐殺に繋がった理由として一番に考えられるのが、両者の競合的な関係であったと考えられる。タスマニアは島であるため、両者が存在できる空間は限られている。また食料が豊富で安定した暮らしが営める場所と言え、タスマニアという限られた空間の中でさらに少なかったはずである。白人たちが入植した後、増え続ける白人人口を維持し拡大しようと思えば、白人たちとタスマニア先住民たちの間で限られた生活資源を巡っての競合関係が自ずと生まれてくる。彼らの競合関係は熾烈で、短期間での解決を要したと考えられる。なぜならば、タスマニアの空間の中で生活資源を得られないということは、白人、タスマニア先住民の両者にとって生命の危機に関わる重大事だったからである⁽⁸¹⁾。本土で行われたような長期的な勝利を待つことは、明日の食料危機や死亡を意味する。今生活資源を確保できるか、という必要性が短期間で競合関係を終結させる必要性を発生させた。

両者の生活資源を巡る争いが短期間で結論を見る必要性があったことは、タスマニア先住民の虐殺を生み出している。相手を最短で生活資源争奪の競合関係から蹴落とすのに有効な方法は、同化でも隔離でもなく、相手をその場で殺してしまうことである。このようにして、虐殺を中心にしたタスマニアの先住民対策が行われた。政府が隔離を訴えかけても、入植者たちの追及は終わらなかった。そして、タスマニア先住民は生活資源を競合して白人と争うほどの脅威ではなくなるまで、壊滅的な人口減少を経験したのである。

4.3. 競合関係の終結宣言と“存在抹消”の選択—行動と区別のスパイラル—

白人入植者の行動が、タスマニア先住民の大規模な虐殺という形で表面化したことについて前項で述べた。これによりタスマニア先住民はかなり大幅な人口減少を経験しているが、なぜ歴史上でタスマニア先住民だけが絶滅したことになっているのか、ということは説明されていない。最後の純血のタスマニア先住民はトルガニニである。だが、それは一

(81) 入植初期、食料の調達を要請するための船が難破して食料調達に出向できる船がオーストラリア側に残っていないなどの危機が実際に発生している。また、食料調達をしにいった船が距離的な問題から、戻ってくる頃にはすでにオーストラリアの食料庫が空になり、少しでも船の到着が遅れていれば、餓死者が出るような状態だったということも歴史に記されている。ブレイニー（1996）邦訳 p.44-p.45。

一般的に流布した情報であってその真偽の判定は難しく、実際何人かの学者の意見が異なっている点についても注目したい。最後の純血のタスマニア先住民の遺体を巡って激しい争奪戦は起こっているが、その後の最後のタスマニア先住民を巡る議論についてはあまり熱心に行われている様子が見られない。仮に、トルガニニが本当に最後の純血タスマニア先住民であるのか、そして他の人間が純血のタスマニア先住民であったか、ということに関して本当に解明しようとすれば方法はあるだろう。遺伝子分析など最新の科学技術が駆使され、決着をつけるに至るような事実を発見することも不可能という訳ではないだろう。しかし、Taylor が記したように“誰が最後であるかは、あまり肝心なことではない。”というような、記述も見られ矛盾を感じる。

これらの一連の矛盾する出来事は、“最後の純血タスマニア先住民の死亡”が持つ意味合いについて示唆する。つまり、最後の純血タスマニア先住民が死亡したということについて、何らかの共有された伝説（認識）があればよい。伝説が必ずしも事実であるということが求められないように、最後の純血タスマニア先住民が事実であるかどうかは肝心な問題ではない。その伝説が果たすように期待されているのは、白人とタスマニア先住民の間の競合関係の終結宣言であると考えられる。白人入植者は熾烈な差別と虐殺を行ってきたが、だからといって彼らがこれを永遠に続けていくわけには行かない。常に虐殺をしなければならぬような高度の緊張レベルで戦い続けることは白人側の社会も疲弊させる。ある一定の緊張レベルで虐殺は行われたが、本来の競合的關係が崩れるような圧倒的な力関係が出来てしまえば、その緊張を維持することは無益になる。しかし、攻撃を正当化するような区別・感情・行動をいまさら翻すことは集団として難しい。そこで、次に取られるべき行動は決定的な終結宣言の流布である。それが最後の純血タスマニア先住民の死亡伝説である。終結宣言として最後の純血のタスマニア先住民の死亡が公表されるという行動で、差別は最終段階に至ったといえる。

最後の純血のタスマニア先住民の死亡が公表された頃、混血のタスマニア先住民たちは隔離されたままでいた。彼らが白人でもタスマニア先住民でもない存在であることはすでに第3節1項で説明した。彼らをタスマニア先住民として攻撃することも、白人であるとするのも、白人社会がどのような区別、感情、行動を行うかによって自由自在である。しかし、白人たちはタスマニアの社会の中で支配者としての地位を確立しており、混血のタスマニア先住民たちは隔離されており脅威とはならなかった。白人社会にとって最も有益なのは、彼らをそのまま隔離し、徹底的に周辺化、世間から忘却させることであったといえる。なぜならば、そうすることで再び戦うに足らない混血のタスマニア先住民という敵をわざわざ引き合いに出す必要性はなくなるからである。そして、混血のタスマニア先住民たちの祖先であるタスマニア先住民に対して行った行為について、白人たちが罪を問われることがなくなるからである。このように混血のタスマニア先住民に対する区別は、終結宣言を行いたい白人たちの思惑に操作された。結果、一番白人たちにとって有益であった純血のタスマニア先住民の最後の一人の死亡と連携して、混血のタスマニア先住民の存在抹消が行動と区別のスパイラルの中で行われたのである。

5. 結び

本論ではタスマニア先住民が絶滅し、存在としても抹消されていくという高度な差別のケースを動態的な差別定義によって分析してきた。タスマニアに焦点を絞って議論を始め、タスマニア先住民に関する区別・感情・行動という要素を実例に沿って検証した。さらに、タスマニア先住民のケースにおける区別・感情、感情・行動、区別・行動の各スパイラルについて現実に起きた社会現象と合わせて説明した。分析の結果タスマニア先住民と本土のアボリジニの行く末を大きく分けた“タスマニア先住民の絶滅”は、タスマニアの白人入植者たちの白人パラノイアに一定の終結を見ることを発端として動いたスパイラルの結果であったと結論付けた。

辞書や百科事典に記されている「純血タスマニア先住民の絶滅」という言葉の意味と背景について動態的差別の定義を用いることでプロセスとして解明しようとしたことは新たな挑戦であったと言える。確かに先行研究の指摘でも、謝罪すべき相手を不在にすることで自分たちの罪を贖罪しようとする白人たちの隠蔽が指摘されている。しかし本論はこのような結末だけで議論を片付けずに、結末に至るプロセスまでも議論に包括した点で大きな展開を得ることが出来たと思う。動態的差別の定義は、新し過ぎて概念として完成されているとはまだ言いがたく、検証も不十分である。より差別の定義を推敲し、より厳密に定義の適応力の限界、不備な点について分析を深め明確にしていることが求められるだろう。このタスマニア先住民のケース検証を第一歩として今後もさらに多くの現実の社会現象に重ね合わせて考察を深めることとしたい。

参考文献

- Doris Pilkington 著, 中江 昌彦訳 (2003) 『裸足の1500マイル ドリス ピルキングトン』メディアファクトリー
- George Arthur Akerlof (1976) “*The Economics of Caste and of the Rat Race and Other Woeful Tales*” *Quarterly Journal of Economics* Volume 90, Issue 4
- H. Ling Roth (1898) “*Is Mrs. F. C. Smith a “Last Living Aboriginal of Tasmania”?*” *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* Vol. 27. p.451-454.
- Jeffrey M. Masson, Susan McCarthy; 小梨 直訳 (1996) 『ゾウがすすり泣くとき—動物たちの豊かな感情世界』河出書房新社
- John Gardiner-Garden (2000) “*The Definition of Aboriginality*” Research Note Department of the Parliamentary Library
- Population by Age and Sex, Tasmania (2005) Australian Bureau of Statistics
- Rebe Taylor (2004) “*Unearthed: The Aboriginal Tasmanians of Kangaroo Island*” Wakefield Press
- Year Book Australia (2004) Australian Bureau of Statistics
- アル・グラスビー著; 藤森黎子訳 (2002), 『寛容のレシピ—オーストラリア風多文化主義を召し上げ—』NTT 出版
- ガッサン ハージ著, 保莉 実, 塩原 良和訳 (2003) 『ホワイット・ネイション—ネオ・ナショ

- ナリズム批判』平凡社
- ジェフリー・ブレイニー著，長坂寿久，小林宏訳（1980）『距離の暴虐：オーストラリアはいかに歴史をつくったか』サイマル出版会
- ジェフリー・ブレイニー著；加藤めぐみ，鎌田真弓（2000）『オーストラリア歴史物語』明石書店
- マニング・クラーク著；竹下美保子訳（1978）『オーストラリアの歴史：距離の暴虐を超えて』サイマル出版会
- ベンノ・ミュラー＝ヒル著；南光進一郎監訳（1993）『ホロコーストの科学：ナチの精神科医たち』岩波書店
- 青山晴美著（2001）『もっと知りたいアボリジニ：アボリジニ学への招待』明石書店
- 伊藤康子（1974）『戦後日本女性史』大月書店
- 江原由美子（1985）『女性解放という思想』勁草書房
- 小山修三，窪田幸子編（2002）『多文化国家の先住民：オーストラリア・アボリジニの現在』世界思想社
- 佐藤裕（2005）『差別論—偏見理論批判—』明石書店
- 坂本佳鶴恵（2005）『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するか—』新曜社
- 鈴木清史著（1995）『都市のアボリジニ：抑圧と伝統のはざままで』明石書店
- 『世界大百科事典』（1988）平凡社
- 高山純，石川榮吉，高橋康昌著（1992）『オセアニア』朝日新聞社
- 張能美希子（2007）「差別暴走のメカニズム—動態的差別分析のための基本仮説—」CUC Policy Studies Review No. 17
- 藤川隆男編（2004）『オーストラリアの歴史：多文化社会の歴史の可能性を探る』有斐閣
- 松島駿二郎著（2000）『タスマニア最後の「女王」トルカニニ』草思社
- 松村明編（1995）『大辞林 第三版』三省堂
- 鈴木清史著（1995）『都市のアボリジニ：抑圧と伝統のはざままで』明石書店

[抄 録]

本稿では動態的差別の定義を用いてタスマニア先住民抹消について説明した。動態的差別の定義は差別の2つの特徴、時間による差別の変化と差別の多面的な社会的機能に注目して提唱されている。従来の差別研究で、差別は画一的にネガティブな現象として捉えられ、十分な検証を終えずに差別の撤廃という目的に向けて議論は進められがちであった。しかし、動態的差別の定義においては、差別が比較的無害な状態から、有害な状態へと変化するとしており、さらにそれらの変化が差別要素のスパイラルによって行われる、と説明されている。

タスマニアの先住民は多くの書物で「絶滅した」とされている。しかし2001年現在、タスマニアのアボリジニの人口は15,733人居り、彼らは純血ではないものの確かにタスマニア先住民の子孫である。本稿ではタスマニア先住民のケースは、存在自体を抹消されてしまう、という差別の最悪のレベルにまで達しているとした。その上でなぜ、タスマニア先住民の存在が無視され、抹消されてしまうのか、という疑問について動態的差別の定義を用いて論じた。

—Abstract—

This article elucidates on the process that the Tasmanian Aboriginal commonly have been understood as a “doomed race.” To discuss this topic, this paper introduces a new approach entitled “Basic Hypothesis for the Movement of Discrimination”. The Basic Hypothesis for the Movement of Discrimination focuses on two features of discrimination. Firstly, attention is given to changes of discrimination as time passes. Secondly, emphasis is put on the many-sided social functions of discrimination. Therefore, my “Basic Hypothesis for the Movement of Discrimination” thinks discrimination as various social phenomena which can be both, harmless and damaging.

Most literature communicates the Tasmanian Aboriginal as a “doomed race.” But in 2002, there were 15,733 Aboriginal people in Tasmania. They are of mixed racial marriages, and as are descendants of the Tasmanian Aboriginal considered Aboriginal people. Even though there still are Aboriginal people in Tasmania, why does history treat them as a “doomed race.” This paper discusses the Tasmanian Aboriginal case by the “Basic Hypothesis for the Movement of Discrimination”.